

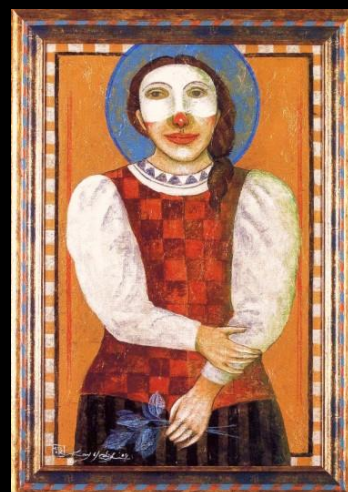
わが裡なるピエロたち

白い粉を掃いた顔、しゃくれた赤い鼻、パンパンに張り切った赤い頬。口元はいくぶん不自然につりあがり、微笑というよりは時に引きつったような笑みを浮かべている。しかし彼女たちは、彼らは、決して固有の表情や感情を持ってはいけない。生々しく現実的でも、誰かしら知っている人に似ていてもいけない。悲しげでも、異常に嬉しげでも、苦しげでもいけない。固有名を持たない、ある一つのステレオタイプの人間。そして感情を極度に抑制したステレオタイプの人間像は、ピエロと仮面でしか表現できないのだ。いつも同じ表情と同じマスク。それなのに、画布の上では無個性という個性と、無国籍という特性を備えた人間であり、何かしら言いたげな、何かしら問いたげな表情と人格を持った人間であってほしい……、と言う矛盾した思いが錯綜する。



2005年作<わが裡なるピエロー-左>

彼らは、観る人たちに夫々違った問いかけをする。見る人たちの心理状態によって、それは陽気な質問のこともあり、深刻な質問のこともある。それは永遠に答えのない問いかけ。ピエロたちの表情に富んだ無表情のように、永遠に循環する決して答えられない問い……。その永遠に答えられない問いを発するのは、描かれたピエロたちではない。観る人自身なのだ。



<わが裡なるピエロー-右>

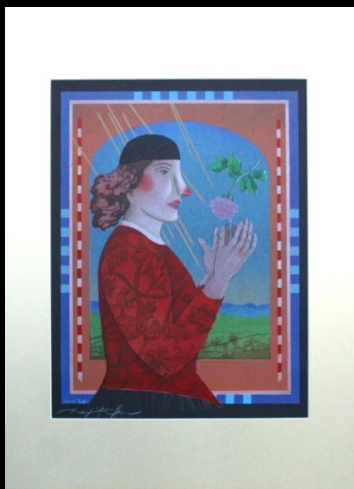
それが私が描き続けるピエロたちだ。本当のモデルは使わない。彼らはいつも私の裡に内在し、語りかけ微笑みかけ、挑発し慰撫する。それはある日、ある時の私自身であり、また記憶に蘇るかつてどこかで出会った人たちとその表情でもある。だから誰という特定の人ではない、単なる誰かなのである。だから彼らは現実的であっても、現実的であってはならない。写実的であっても、写実的ではならない。

こうしていつの頃からか私の裡に住みつくようになったピエロたちは、私と観る人たちの心の中を時に優しく、時に厳しく見つめている。彼らと対話することは、自分自身と対話することでもある。仮面はまた、ピエロの白い化粧と同様に生身の人間の表情や感情を覆い隠し、無表情、ステレオタイプの人間を作り出す一つの大切な演出でもある。仮面をかぶることによって、外面的には無表情を装いながら、人は他者の目を意識することなく大胆になり、初めて自己を存分に発揮することができる不確かな存在でもあるのだ。

表情ある無表情、現実的非現実、あるいは非現実的現実を描き出すために、私は画面に無数の皺や傷をつける。それは否定された現実でもあり、新しく作りだされた現実でもある。皺と傷が、本来はつややかな肌や衣服を現実から引き離し、現実と写実を超越した現実を創造する。

私たちは一生の間にどれくらいの人間と出会うのだろうか。そして一体どれくらいの人たちとどんな関わりを持ち、どれくらいの人たちがどのような形で、どのような感情を伴って記憶に残るのだろうか？

長い間、私はある人間たちに出会っていた。数百年前のヨーロッパに実在し、今は画家たちの画布の中に生きていたかつてのモデルたちだ。彼らは絵を志した当初からずっと私の心に住み続けていた、私の最も身近で懐かしい人たちである。彼らは、長年スタイルを変えては私の画中に登場し、立ち去ってはまた登場した。私は彼らに非常な親しみを感じ続けて来たのだが、実在であっても過去に埋没した非実在のモデルたち、その多くが硬直した無表情をたたえたモデルたちは、奇しくも私の追う表情ある無表情、永遠のステレオタイプ、写実を離れた写実という理念に合致した。したがって、「古代追想」と名づけたシリーズの中に登場する古代を連想させる人物たちは、私の描く永遠なるステレオタイプのピエロと仮面をかぶった人間たちの変形、延長線上に位置するものなのだ。



2004年の夏、私は実在のある人間と出会った。スイスのリトグラフ工房の主催者エルンスト・ハンケである。数百年の伝統に培われた彼の優れた石版画の技術と百年の歴史を持つ印刷機によって私は新たなピエロたちをリトグラフで生み出すことができた。長年学び慣れ親しんだリトグラフを、その重労働のために二十



年間も中止しなければならなかった私にとって、ハンケとの出会いは新しい可能性との出会いでもあった。[<2006年作石版二連画『ばら-女(左上)』と『ばら-男(右上)』>]

今年で滞蘭47年、これから一体どんなピエロたちと巡り合えるのだろうか？画家たちがピエロや仮面を描かなくなって、もう随分たつような気がする。

2012年11月、オランダ・レーウヴェイク湖畔のアトリエで
吉屋 敬